

原著論文

フンボルト陶冶論における「人間」の地位 —初期思想から比較人間学計画へ—

**Man's Position in Wilhelm von Humboldt's Theory of "Bildung":
From Early Thoughts to The Plan for a Comparative Anthropology**

伊藤 敦広
Atsuhiko Ito

【要約】

ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの陶冶論は、18 世紀西洋における知の在り方の変容と共に生じた特異な存在者としての「人間」への関心に貫かれている。本稿はまず、初期フンボルトにおける人間への関心をエンゲルの哲学講義録等のテキストを例にとって確認した。次にカント哲学の影響が顕著であるシラー宛書簡を主な分析テキストとしたうえで、フンボルトの学問観の変遷を辿り、フンボルトの人間学および陶冶論が「目的論的学問」として位置づけられることを示した。最後に「比較人間学の計画」を取り上げ、フンボルトの人間理解の特徴が、諸々の認識を統合したうえで、存在と当為を同時に示す統一的像を構成する点にあること、そしてフンボルトの場合、この通常の意味での科学を超越した手法が、個別具体的存在としての人間を理解するための方法として敢えて選択されていることを明らかにした。

【キーワード】

フンボルト、陶冶、人間学、他者理解

I. 本稿の目的・意義・構成

本稿は、フンボルト陶冶論における「人間」の地位がいかなる仕方で変遷し、そこからフンボルトがいかなる他者理解の手法を考案したかを解明する。

陶冶・教養をつねに思考の主題としたフンボルト (Wilhelm von Humboldt, 1767-1835) は、この問題と人間学の問題を並行的に捉えていた。フンボルトにおいて陶冶論と人間学の関係が最も明確に示されるのは、18 世紀末頃に成立した「比較人間学 (Plan einer vergleichenden Anthropologie)」(1797) を中心とするテキストである。とはいえ比較人間学の計画が構想される時期までに、フンボルトの人間理解とその研究手法が初期段階からいかなる変遷を遂げたのかに着目し、それを跡づける試みはほとんどなされていない。本稿により、人間学と密接に関係するフンボルトの陶冶論の学問的特徴が改めて浮き彫りになるだろう。

構成は次のとおりである。まずエンゲル哲学講義録に見られる学問区分の特徴を手がかりに、初期フンボルトにおける実践哲学および人間学への関心を確認する(Ⅱ)。次にシラー宛書簡に見られる学問区分を取り上げ、人間学と陶冶論の関係性を明らかにする(Ⅲ)。

これを踏まえたうえで「比較人間学の計画」を取り上げ、フンボルトにおける人間理解の特徴を示す（Ⅳ）。最後に本稿の結論を簡潔に示す（Ⅴ）。

Ⅱ. 初期フンボルトにおける実践哲学的関心と学問の区分

1. 18世紀ドイツにおける「人間」への関心

論述を始めるにあたって、当時の人間学をめぐる歴史的状況について概観する。

フーコーの『言葉と物』の図式によれば、「人間学」は近代に成立した、近代特有の学問である。ここで研究対象になる「人間」とは、労働し命を持ち言葉を喋る有限な存在としての人間である。マルクヴァルトによれば、ドイツにおいて「人間学」という題を持つ書籍が多数出版され始めたのは18世紀後半である¹。「人間学」を論じた当時のドイツの主な学者としては、『医師と哲学者のための人間学』（1772）を著し哲学界にも大きな影響を与えた人間学者プラトナー（1744 - 1818）以外にも、フンボルトがゲッティンゲン大学で直接教えを乞い『形成衝動』（1781）を著したブルーメンバッハ（1752-1840）、ゲーテとともにイエーナで解剖学研究に従事した際の助言者ローダー（1753-1832）などが挙げられる。ゲーテ自身も比較解剖学研究をつうじて人間と猿の類縁性を証明する顎間骨を発見し、カントは「比較人間学の計画」が書かれた時点ではまだ出版にはいたっていなかったものの、すでに自然地理学講義から派生した人間学講義を行っていた。

他の生命とは異なる特異な存在者としての人間の学はこの時代の潮流であり、フンボルトはその渦中において自身の思想を練り上げた。「労働し命を持ち言葉を喋る有限な存在としての〈人間〉」、後のフンボルト自身の表現によれば「一般的かつ形而上学的に考えられた人間」ではなく、「現実に存在し生きている人間、現世のさまざまな地理的・歴史的諸関係のすべてに窮屈に縛られている人間」に関心の焦点が定められる（GS 6, S. 120）²。フンボルトはこの近代的「人間」の独自性を掴むため、従来と異なる理論枠組みを創出する必要に迫られた。その多様な学問的努力を貫くのは旧来的思考では捉えられない何ものかとしての「人間」という主題であり、メンツェの言葉を借りれば、フンボルトの全思索は人間を中心に展開されたのである³。

フンボルトにおける人間研究の特性を見極めるためには、彼の学問論における「人間」の位置づけの変遷を跡づける必要がある。というのもフンボルトにおける人間に対する態度は、他の思想との接触により徐々に変化しており、その変遷を通じて人間研究の学問論的位置とその特色が確認できるからである。ゆえにまず初期フンボルトにおいて、人間および人間学がいかに位置づけられていたのかを確認する。

2. エンゲル哲学講義における「人間」の地位

フンボルトは1785年頃に通俗哲学者エンゲル（1741-1802）を介して、諸学の体系を扱う学問としての哲学に初めて本格的に取り組んだ。ライプニッツ＝ヴォルフ学派の影響（具体的にはライマールス、フェーダーなど）を如実に示すエンゲルの哲学体系に着目すると、初期フンボルトの学問観が垣間見える。それによれば、「事物の一般的性質を考察する学問」（GS 7, S. 361）である哲学は、まず理論部門と実践部門に分かれる。理論部門は「事物のあるがままの姿を考察する」、「あるいはわれわれの悟性（われわれの認識力）の目的、

すなわち真理に到達するための手だてを含む」(ebd.)。この部門は、形而上学（ここに存在論、宇宙論、経験的心理学・科学的心理学、自然神学が含まれる）、論理学、自然学からなる。

これに対し実践部門は「事物のあるべき姿を考察する」、「あるいはわれわれの意志（われわれの欲求力）の目的、すなわち善に到達するための手だてを含む」(GS 7, S. 363)。この部門は倫理学、家政学 (Oekonomik)、政治学からなる (図 1 参照)。

		哲 学				
部 門	理論部門			実践部門		
考察対象	事物のあるがままの姿			事物のあるべき姿		
目 的	真 理			善		
学問領域	形而上学	論理学	自然学	倫理学	家政学	政治学

図 1 エンゲル哲学講義録における哲学体系

この区分自体はアリストテレス以来の基本的学問図式を踏襲している。とはいえここでは、人間の生における実践哲学の優位が説かれている点に着目したい。

実践哲学は哲学 (Weltweisheit) の一部門であるが、これはわれわれの行為により密接な関係を持つため生きるうえではより重要である。この部門はたしかに理論部門にもとづくが、理論部門が悟性の目的——すなわち真理に通じるのに対して、意志の目的、真理の認識そのものの目的——つまり幸福 (Glückseligkeit) に通じている。(GS 7, S. 460)

のちに啓蒙としての自己陶冶に専心するフンボルトの立場は、人間の生における実践哲学の優位というこの教義に出所を求めることも可能だろう。

とはいえこの哲学体系において、依然「人間学」は独立した学問領域としては認められていない。ここには「身体 = 物体 (Körper) 概念から帰結するすべてのものを扱う形而上学的な身体 = 物体論 (Körperlehre)」である「身体学 (Somatologie)」(GS 7, S. 432) が存在しても、旧来的な心身の二元的関係と前者の優位が前提となるがゆえに、心身の「調和 (Harmonie)」(GS 7, S. 444) はあっても相互作用はなく、知性と感性の二重体としての人間の独自性は直接的考察対象にはならない。フンボルトはこの哲学体系では「私の身体性 (Physik) や感性のすべてが無意味になる」(ebd.) ことに違和感を示している。つまり、ここには先のような意味での「人間」固有の領域が存在しないのである。

3. 全体としての人間

ゆえにフンボルトはエンゲルから力概念を初めとする諸概念を受け入れたにもかかわらず、こと人間理解に関してはこの体系を拒否することになった。フンボルトが探求を試みる「人間」は、心身のいずれかに還元しえない「力」、「作用」あるいは「全体」としての人間である。1791 年のカロリーネ宛書簡では次のように言われる。

人間は本来、無限の範囲をもつあらゆる知が立ち返る場である。それはたんに間接的なこともあるが直接的なこともある不断の人間研究なのである。しかしわれわれはせいぜい

人間を冷たく死んだ不毛な記号で認識するにすぎず、明らかになるのは人間の活動の総和ばかりで、内面の生きた不断の活発な作用ではない。ゆえにここから […] 物事の結果ばかりを重視して、力それ自体がいかに存在し、いかに作用するかを軽視することになっている。(Briefe, 1, S. 403)

フンボルトがかつての哲学体系から距離を取っていたことは、1789年の日記での人間学者イート(1747-1813)への批判からも明らかである。それによると、

彼は生理的なものと心理的なもの過度に、しかも一昔前のヴォルフの概念にしたがって分離しているように思われた。[…] しかし私はつねに、人間学は特に次の点で依然遅れているかのように思っている。すなわち人間を本当に一つの全体と見なし——精神、心情、身体という——人間の多様な側面のすべてを、それらの連関から知るという点である。この連関においてこれら諸側面はたんに様々に変容を被る一つの全体にほかならない。こうしたことが行われないうえに、性格の知識は——これがあらゆる人間学の本来の目的であり、もしかすると本来の人間学そのものであるが——けっして一つの学にはなりえないだろう。他方でそのためには、われわれが感覚や思考と名づけているものの本性、さらには身体的なものとは非身体的なものの連関についてのきわめて多くの精緻な研究が先行しなければならないだろう。(GS 14, S. 211)

このようにフンボルトは感覚と思考、そして精神、心情、身体を別個に考察するのではなく、それらの「連関」を捉えることで、人間を一つの全体として考察することの必要性を説く。これが独立した学としての「人間学」の成立根拠となるのである。

しかしフンボルトの人間学の特徴は、それが全体としての人間の現状の正確な把握にとどまらないことにある。フンボルトはたんに人間が何であるかだけでなく、その認識を介して人間がいかに生きるべきかを同時に問題とする。1791年のカロリーネ宛書簡には、フンボルトの立場が端的に現れている。

ある研究、最も重要な研究が依然として遅れている […]。これはまさに人間そのものの研究、人間がいかにあるのか、人間がいかにあるべきかの研究である。(Briefe, 1, S. 385)

「人間がいかにあるのか」と「人間がいかにあるべきか」を同時に問うものであるという意味で、初期フンボルトが構想した人間学は、存在のみならず、当為ないし規範を重要な論点とする。分割された能力の総計としての人間ではなく、それら能力の根底にある活動(力)としての現実の「全体としての人間」そのものを認識することを通じて、その人間のあるべき姿までもも把握することが、「実践哲学」に重きを置く初期フンボルトの独自の課題となったのである。

Ⅲ. シラー宛書簡に見られる人間学と陶冶論の位置づけ

1. カント研究による学問体系の変容

初期から人間に対する独自の関心を有していたフンボルトに対し、新たな哲学的道具立てを与えたのはカントである。ゲッティンゲン大学在学中の 1788 年時点で、フンボルトはすでにカントの著作に入念に取り組んでいるが (vgl. Briefe, 1, S. 99)、1793 年のケルナー宛書簡では、カントの批判期の著作をすべて読み返したこと、そしてこれらの著作が「法学上の問題における法典 (Corpus iuris) 同様、哲学上の問題においてけっして手放してはならない規範集 (Codex)」であるという評価を下していた。(Briefe, 2, S. 181)

フンボルトが徹底したカント研究を介して、その概念枠組みを利用しつつ自らの学問体系を構築しなおしたことは、イエーナでシラーおよびケルナーと共同でカント研究をした後、1796 年のシラー宛書簡で披歴された彼の学問観を見れば明らかである。それによれば、

あらゆる認識は現実の対象か理念に、すなわち条件づけられているものか無条件なものに関わる。これに従い、二つの区分を行なう。この内のどちらも、この二つのものの一方のみを特に扱うものである。1. 現実の経験対象を特定の条件づけられている目的のために扱う技術的学問および技芸、2. 純粹にあらゆる経験の外にある概念を扱う思弁的学問——数学、思弁哲学。

しかし、条件づけられているものは無条件なものの規則に従って、つまり理想に従って取り扱われなければならない。この理想は直観すなわち想像力 (Phantasie) の理想か、認識すなわち理性の理想である。これに従って二つの新しい分野が成立する。3. 美的学問、芸術、4. 理性の理想である完全なものに従って現実の対象を扱う目的論的学問。ここに私は最も広い意味での人間の知的・道徳的陶冶の全体を、したがってこれまで実践哲学の領域を構成していたすべてのものを数え入れる。(Briefe, 3, S. 203)

すなわち、あらゆる学問は(1)「技術的学問」および「技芸」(Künste)、(2)「思弁的学問」、(3)「美的学問」すなわち「芸術」(Künste)、(4)「目的論的学問」に大別される。明らかに三批判書に依拠しているこの区分において着目すべきは、「実践哲学の領域を構成していたすべてのもの」を含む「目的論的学問」である。これは人間の実践において「条件づけられているもの」、たとえば特定の制度、法、行為などを、目的論的に実践可能な(無条件な)「理想」、すなわち「完全性」の観点から扱うものである。そしてこの目的論的学問には「最も広い意味での人間の知的・道徳的陶冶」も含まれる(図 2 参照)。

目的論的学問の特徴は、現実への適用可能性に特に重点が置かれていることにある。現実の「条件づけられている」個体に適用可能な理想を把握するためには、何よりもまずその個体の現実をあるがままに知らなければならない。ゆえにこの学問では、対象の本質を思弁的に探求することよりも、むしろ経験的研究が優先される。つまり対象となる個体を身体的、知的、道徳的といった多様な側面から把握することが肝要となるのである。

学 問				
対 象	現実の対象			理 念
目 的	特定の目的	直観・想像力の理想	認識・理性の理想	無制約な目的
学問領域	技術的学問 技 芸	美的学問 芸 術	目的論的学問 実践哲学	思弁的学問 数学・思弁哲学
対応する精神の力	悟 性	想像力を介した 感性と理性の関係	実践理性	純粹理性

図2 シラー宛書簡における学問体系

この四つの学問領域の区分はやはりカントの用語法を踏襲するかたちで設定されており、しかもこれが人間のすべての精神的活動を包括するという。先の文章に続けてフンボルトは次のように述べている。

これら四分野は、これに従って四種の精神的陶冶と四種の知的性格が区別できるものだが、私が思うに、たんに完全に相互に区分されるだけでなく、まさに人間の精神の関心を引くことができるあらゆるものをも包括している。同様にこの区分は人間の精神の個々の諸力にも対応している。つまり技術的なものは悟性に、思弁的なものは純粹理性に、美的なものは想像力による感性の理性への関係に、目的論的なものは実践理性に対応する。美的なものにおいても目的論的なものにおいても感官と感覚の対象は理性理念に関係づけられるが、美的なものにおいては形式に従って想像力を通じて、目的論的なものにおいては素材に従って悟性を通じて関係づけられる。(Briefe, 3, S.203f.)

したがってフンボルトの実践哲学・陶冶論は、学問論的に言えば「実践理性」の領域に位置する。陶冶論は実践哲学として、現実の個人を、その個人に適用可能な「理想」という観点から考察し、現実の個人の在り方という素材に従いつつも、「悟性を通じて」それを「理性理念」に関係づけるとまとめることができるだろう。

2. 神的人間——自己陶冶における統制的原理

比較人間学がカントの実践哲学を念頭に置きつつ構想されているのだとすれば、一種の実践哲学として個人に可能な「理想」を探求する立場、「目的論的学問」としての陶冶論という立場も、『純粹理性批判』に見られる「理想」と「神的人間」のくぐり対比させることでより明瞭になるだろう。カントはそこで、次のことを率直に認めなければならないと述べている。すなわち、

人間の理性は理念だけでなく理想をも含んでいるということ、理想はプラトンの言う理想のような創造的な力をもってはいないが、**実践的な力**（統制的原理としての）をもっており、ある**行為**の完全性の可能性の根底にあるということである。[...] 理念が**規則**となるように、理想はこのような場合に、**似姿の全面的規定の原型**として役立つ。そして、われわれはこの神的人間のふるまい以外には、われわれの行為の基準を自分の中にもちあわせていない。われわれは自分をこの神的人間と比較し、判定し、またそのようにして、けっして達成できなかりと、自分を改善するのである⁴。

自己を改善するための「原型 (Urbild)」としての理想。自己の内にある「神的人間」のふるまい。フンボルトが想定した理想は、まさにこの自己に潜む「神の似姿」であると解釈できるだろう。フンボルト自身とドイツ神秘主義にどれだけ思想的関係性があるのかは定かではないとはいえ、その陶冶・教養概念には、自己の内に潜む神の似姿という伝統的な陶冶・教養のメルクマールが見られる⁵。ただしカント哲学を介することで、その内実は改変されている。つまりフンボルトにおいて自己に内在する神の像は、批判哲学の枠組みに従い、実践的力を有する統制的原理に変換されるのである。

上記の引用からも明らかなように、カントは「理念 (Idee)」と「理想 (Ideal)」を明確に区分する。その用語法に従えば、本来的に理想は個別的でしかありえない。しかしフンボルトは敢えて「個別的理想」という表現を用いることで、自身の立場を明確化している。1797 年のシラー宛書簡では次のように述べられる。

この個別的理想という考えが、驚くほど私の頭を離れない。この考えをそれに相応しく論じ、次のことを示す必要があるように思われる。つまり人間知というものは、それが完全かつ哲学的であるべきなら、主体の内で理想へ向けて完成可能なものだけを捜し出さなければならず、人間陶冶というものは結局これを維持し、純化し、向上させることのほかには何の関係も持たないのである。この些細だが万人にとって分かりやすくもなければ既知のことでもないこの考えを、私自身の論文で論じ、教育に応用することを考えている⁶。

このようにしてフンボルトの人間学、そして陶冶論は啓蒙主義的な実践哲学的関心に貫かれ、カント哲学を介して目的論的学問として定義づけられることになる。こうした学問論的前提が、ほぼ同時期に書かれたと推測される比較人間学の背景ともなるのである。

IV. 「比較人間学の計画」の諸特徴

1. 初期思想の影響

ではフンボルトが構想した人間学とはいかなるものなのか。「比較人間学の計画」(1797——以降は「計画」と表記する)は小論であるものの、その主題は多岐にわたるため、以降では人間理解の手法という観点のみに焦点化して考察を進める。

「計画」は次のように始まる。

比較解剖学で人間の身体の性質が動物の身体の研究によって検討されるのと同様、比較人間学では様々な人間の種族の道徳的 (moralish) 性格の独自性が列挙され、比較しつつ評価される。

[...] 人間の研究ほどわれわれの不断の伴侶であるものはない。重要なのは、生活全体が生み出す豊富な素材を収集し、精査し、分類し、処理することだけである。

これを行なう定めにあるのが、比較人間学である。この人間学は一般人間学に依拠し、人間の種族的性格を既知のこととして前提とすることで、その個々の相違だけを探求し、

たんに偶然的で一時的なものにすぎない相違を本質的で不変的な相違から区別し、その原因を追求し、その価値を評価し、それらの相違の取り扱い方を定め、その発展の行く末を予測する。(GS 1, 377)

ここには初期以来のフンボルトの立場が明確に読み取れる。「比較解剖学」との類比にもとづき構想されていることから明らかなように、初期から一貫している第一の点は、経験研究の重視である。フンボルト自身イェーナで解剖学研究に従事したが、先に挙げたプラトナーらも含め、当時の人間学者は医学者・解剖学者でもあった。「人間」の探求はたんに思弁的に行なわれるものではなく、経験研究を基盤に行なわなければならないとされるのである。

第二に、「存在」と「当為」が同時に扱われている点も特筆される。「計画」以前の用語法によると「目的論的学問」である比較人間学は、たんに現実のあるがままの姿についてデータを収集するのでもなければ、ただ思弁的に人間のあるべき姿を設定するだけでもない。現実の人間のデータを集め、そこから「理想」を生み出し、その理想にもとづきその人間の「価値を評価し、それらの相違の取り扱い方を定め、その発展の行く末を予測する」のである⁷。

2. 存在と当為を同時に表す「性格」の形成

比較人間学は、人間の感性と知性、存在と当為を同時に主題とする。この人間学の対象は「全体としての人間」であり、これを理解するための手続きはそれゆえ、専門分化した学問研究の通例からするときわめて異質なものとなる。

人間をあるがまま正確に知ると同時に、その人間が何に発展できるかを自由に判断するためには、実践的な観察感覚と哲学する精神が共同で働いていなくてはならない。(GS 1, 378)

人間の個別的性格がそれによりうる理想的状態のために究明され、この題材がたんに個々のケースで断片的に扱われるだけではなく、一般的命題で、理論として扱われるべきだとすれば、その扱いはあらゆる種類の自然本性 (Natur) の考察をやり遂げねばならず、同時に自然誌的、歴史的、哲学的でなくてはならない。(GS 1, 395)

ここでフンボルトは個別的人間の理解に資するため、認識を三種に区分する。すなわち、自然誌的認識、歴史的認識、哲学的認識である。自然誌的認識は、自然の一部としての人間、自然必然性の領域にいる人間を対象とする。この認識において人間の行動や変化は計算・予測可能なものであり、認識の正しさは実験によって確認できる。

歴史的認識は選択意志 (Willkühr) を持つ存在としての人間を対象とする。この領域において人間は自然の強制にも理性の強制にも服さないため、その行動や変化はつねに偶然として現れる。ここでは計算や実験を用いることはできない。「理由 (Warum)」を問うことは許されず、現実を観察し記録することだけができる。

哲学的認識は経験に依存しない〈純粋な〉人間を対象とする。この認識において人間は、

理性による自由を有する叡智的存在者として現れる。自由にもとづく必然性は経験に依存しない分析によってのみ認識されるものであるから、この認識は人間の形式をもっぱら思弁的に分析することで得られる (vgl. ebd. 図 3 参照)。

	対 象	方 法	領 域	主導的な人間の能力
自然誌的認識	自然の一部としての人間	実 験	自然必然性	悟 性
歴史的認識	歴史的な存在としての人間	観 察	選択意志	感 性
哲学的認識	純粋な叡智的存在としての人間	思 弁	自 由	理 性

図 3 比較人間学における認識の区分

しかしこれらの三種の認識は、いずれも不可欠ではあるがそれぞれ単独では不十分である。自然誌的認識のみで人間のあるべき姿を論じることはできず、歴史的認識のみでは法則として現れる人間の本質に達することはできない。哲学的認識は純粋に見れば正しく、そこから経験に依存せず人間一般のあるべき姿を打ち立てることもできるが、現実の個別具体的人間の性質を考慮しないがゆえに現実には適用不可能である。ゆえに人間学は「同時に自然誌的、歴史的、哲学的でなくてはならない」。

ここでフンボルトは、これら認識を統合するために（暗に）研究者自身の構想力の重要性を説く。構想力によって、三種の認識を結びつけ、そこから一つの像を作り出すのである。現実の個別具体的人間を捉えるためには、先のような一般的認識では不十分であり、実際にその人間を観て、構想力によってその人間の存在と当為を同時に示す像を創造すること、すなわち条件づけられているものを理想に関係づける点で目的論的学問と共通する美学的学問との類比関係にもとづいて言えば、「現実のものを像に変えること」(GS 2, S. 126) が必要なのである。ここにはフンボルトにおける他者理解の特質が表れている。

現実に存在する「全体としての人間」を理解するにあたり構想力を引き合いに出す比較人間学は、現代の視点からすると究極的には、学問的に一般化不可能な性質を帯びる。事実フンボルトは「比較人間学が差し出す素材は学問的に扱うことはできず、まして理論的に扱うことなどまったくできない」(GS 1, S. 396) ことを認めている。「計画」が方法論に終始することもこの事実に関わる。人間をめぐる諸々の客観的データが収集されたのちに、人間の「像を作る」のは研究者自身の直観である。ゆえにその人間のあるべき姿を直観し、理解したとしても、それを客観的に説明可能なものにするには不可能だとされるのである。

フンボルトはこうして得られる像、形象を、その個体の「性格 (Charakter)」と呼ぶ。存在と当為を同時に示す性格は、十分に現実を反映すると同時に理想的性質を含みこんでいる。そしてこの性格は、研究者の構想力や直観を介して構成されるものであるがゆえに、その内実は不断の探求の過程で変化し続けることになる。

人間学はある段階で、人間を探求する個人の構想力、解釈、直観を重視し、学問的に共有困難なタクト⁸や才覚を前提とするものになる。とはいえフンボルトの人間学は今日的な意味での科学を軽視するわけではなく、むしろそれを基盤としていることは強調しておくべきだろう。こうした方法は、「個体は言表不可能である」という旧来的問題を引き受けたフンボルトが、「人間」に関して示した答えなのである。

V. 結論

フンボルトは18世紀における「人間」への関心の高まりの中で、全体としての人間を自らの研究の主題とした。その人間学はカント哲学研究を介して目的論的学問と位置づけられるとともに、自己の内の個別的な理想は統制的原理として設定されることになる。「計画」はこうした論点を含みこむかたちで成立している。感性の次元を介在させることで個別具体性を帯びた「人間」を把握するためにフンボルトが編み出した方法は、今日的な意味での科学を超越することになった。とはいえそれは個別具体的人間の存在と当為を同時に示すための野心的試みでもあったのである。

注

1. マルクヴァルトは18世紀末からの人間学の隆盛を、「人間学」と題する著書を出版した人物を列挙して示している。18世紀末のものだけでもプラトナー（1790）、ウステリ（1791）、ローダー（1793）、フレミング（1794）、イート（1794f.）、ヴァーグナー（1794ff.）、フンボルト（1797）〔マルクヴァルトはアカデミー版に従い1795年としているが、今日では1797年の成立とされる。Vgl. Wilhelm von Humboldt, Werke in fünf Bänden, hrsg. Andreas Flitner / Klaus Giel, Bd.5, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1960-1981, S.334ff.〕, メツガー（1798）がいる。Vgl. Odo Marquard, Art. "Anthropologie", in: Historisches Wörterbuch der Philosophie, hrsg. Joachim Ritter u.a., Basel/ Darmstadt: Schwabe Verlag, 1971-2007, Bd.1, S. 367.
2. フンボルト「人間の言語構造の相違について」（『双数について』村岡晋一訳、新書館、2006年所収）93頁。本稿では原則的にフンボルトからの引用はアカデミー版全集（Gesammelte Schriften, hrsg. Königlich Preussische Akademie der Wissenschaften, 17 Bde., Berlin: B. Behr's Verlag, 1903-1936. 以降は“GS”と表記する）から行ない、巻数と頁数を併記する。書簡からの引用は批判版書簡集（Wilhelm von Humboldt, Briefe Historische-kritische Ausgabe, hrsg. Philip Mattson, Berlin: De Gruyter, 2014-. 以降は“Briefe”と表記する）から行ない、巻数と頁数を併記する。
3. Clemens Menze, Wilhelm von Humboldts Lehre und Bild vom Menschen, Ratingen bei Düsseldorf: A.-Henn Verlag, 1965, S. 33.
4. A569, B597. 〔『純粹理性批判【下】』河出書房新社、2014年、258頁〕
5. ドイツ的陶冶・教養概念に関しては、拙論で挙げた多数の文献を参照。「失われた社会的／政治的問題圏？：ドイツ的陶冶・教養概念史研究概観の試み」『作新学院大学女子短期大学部研究紀要』第1号、2017年、1-11頁。
6. Der Briefwechsel zwischen Friedrich Schiller und Wilhelm von Humboldt, Band II, hrsg. Siegfried Seidel, Berlin: Aufbau-Verlag, S. 104.
7. 「条件づけられている」特定の個体を実践可能な「理想」という観点から扱うのが陶冶論だとすれば、これとまったく同じ説明が比較人間学にも見られる。「比較人間学が求めるものは自然の対象ではなく、無条件なもの——すなわち理想であるが、しかしこれらの理想は、個々人、すなわち経験的客体に関係づけられることで、個々人が近づくべき目標と見なされる」。 (GS 1, S. 388)
8. フンボルトにおけるタクト概念の意義については拙論を参照。「〈教育的タクト〉と実践としての陶冶論：フンボルトにおけるタクト概念の用例分析」『作大論集』第8号、2018年、95-104頁。